

伏羲の故里—忘れてはならぬ村

合肥晩報記者：左澤華

陝北の奥地、黄河が大峡谷となって流れるところに、伏羲河村というかなり知られた村落があります。この村が有名なのは二つの理由によります。一つは伏羲の生まれたところであり、もう一つは黄河が最も壮麗に流れを変えるところ—乾坤湾に面しているということです。

焼け付く暑さの8月、私は合肥市群集芸術館の学芸員周路氏、中国科学技術大学の教授である王祥氏及び合肥市第49中学の教師の劉敬萱氏と共に高名な延安市延川県土山郷の伏羲村を訪ねました。

伏羲の故里—美しい神話が千年伝わる

三皇(伏羲、炎帝、黄帝)の一人である伏羲はかつて伏羲河村に住んでいたことがあるといわれています。《延川県誌》(清の道光本記載)(*道光は清の皇帝の名に基づく年号 アヘン戦争の直前の頃に当たる)に基づけば、現在の伏羲河村は清代以前は伏羲河村と呼ばれていました。“羲”は繁体字の“義”と文字の形が近いことから、次第に“義”を使うのが一般的になって今日に至っているといえるでしょう。

大昔、黄河流域に洪水がありました。人々はことごとく水に呑まれ、伏羲と女媧の兄妹二人のみが生き残りました。二人はこの黄土の山々が連なる、黄河の流域に住み、人類の命を引き継ぐために、生み育てました。人類の新しい時代が開いたのです。

ですから、伏羲と女媧は私たち中華民族の始祖であり、我々東方世界のアダムとイブでもあるのです。

この話は優美な言い伝えにすぎないかもしれませんが。けれども伏羲河村に立ち、或る老人が黄河に向かい合う山を指して私に語りました。「あなた、あれはなんに見えますか？」それに目をやった私は驚きで一瞬呆^{ほう}けたようになってしまいました。それは女性の巨大な石像ではないですか？ 彼女は西の方角を向き、何かを待ち望むかのように首を挙げ、鼻筋高く、端正な顔立ち、胸は盛り上がり、その輪郭は明瞭で真に迫り、垢抜けて風格があります。「あれは伝説で語られる女媧ですよ！ 私たちは女媧山と呼んでます。」老人は言いました。

乾坤湾—自然の創造になる太極八卦

伏羲河村の地理的位地は特別で、乾坤湾を臨む位置にあります。

乾坤湾(俗称：河懷湾)はそのまま一幅の天然の太極八卦図であり、また、黄河古道と呼ばれる秦晋峡谷からの眺めは陝北の中で最も美しく、最も壮麗な景色の一つでしょう。

焼け付くような8月、私は乾坤亭に立ち、幾重にも連なる山々を遥かに望み、黄河の流れを見下ろして、美しい景色の一切を眼底に焼付けました。黄河はここで巨大なS字型に大きく曲がり、しかも、伏羲河村と山西省の会河村はここで黄河を隔て向かいあい、恰も黄河という巨龍の懷に抱かれた“陰陽魚”そのものです！

ああ、乾坤湾はまさに天と地の創造になるものです。伏羲はここで「仰則观象于天，俯则观法于地，观鸟兽之文与地之宜，近取诸身，远取诸物，于是始左八卦，以通神明之德，以类万物之情」(自然界の森羅万象を觀察して八卦を創め、それによって神の徳に通じ、万物の心のあり方を知るようになったの意)と歴史書は記載しています。

伏羲河村-棗の香で満ち溢れる

8月1日午前8時頃、私たちは延川県を出発し3時間あまりの苦難の末やっと伏羲河村に辿り着きました。その間、私たちは険しい峰峰の間を走り抜け、縦横に走る沟壑gōu hèを飛び越え、目前に迫る山々を瞬時にやり過ごし、窑洞yáodòngは後ろに飛び去って行きました。それは美しい風景の連続でしたが、反対側から来る車が全く見えない320度の急カーブが続く道で、たびたび身体中から冷や汗が吹き出るような思いをしました。私たちが心配を口にすると、運転手は笑いながらいいました。“大丈夫、反対方向から来る車なんかないですよ”。そして正午頃、私たちは遂に伏羲河村に付いたのです。

それは典型的な陝北の小さな村落でした。黄河にぴったり寄り添い、砂洲のある地形を利用し、東から西へ、低いところから高いところへと窑洞yáodòngが山の中腹まで並んでいました。強い日差しの中、緑の木々に覆われて小さな村落は優美で静かなたたずまいを見せていました。

伏羲河村は黄土高原のふとこ深い位置にあり、現在、90戸を越す家に、2000人あまりが住んでいます。昔からここは棗なつめを豊富に産出しており、山も谷も、川岸も、村の内外、更に見渡す限りの砂州はどこもかしこも棗の木です。棗の枝や葉を掻き分けて棗林の中を歩きますと、いたるところから人を酔わす香がぷんぷんと立ち込めて来、ずっしりと重い大きな青い棗が枝もたわわに実をつけていました。その様子は誰も喜びを禁じえないでしょう。棗はまだ熟してはいませんが私はその棗をたっぷり味わいました。

この棗は‘滩枣tān zǎo’と称され、大きくてさくさくと甘く、陝北で名を上げ、全国的に愛されています。この棗を干して二つに割ると中から糸を引き、この棗がどんなに甘いかわかるというものです。伏羲河村の農民たちは棗を誇りとし、棗で生活し、棗を食料その他全ての必需品に換

えているのです。

陝北の老人たち-心をこめたもてなし

伏羲河村の人々は純朴で且つ善良です。私たちが伏羲河村に到着しますと、ここの村人で、延川県で知られた民間芸術家の郭汝林^{guō rǔlín}は親戚の新婚夫婦の家を空けて私たちに泊めてくれました。これには私たちはとても恐縮しました。

村では私たちがどこに行っても、皆、こぞって私たちに家に招き入れ、オンドルの上に座らせて暖かくもてなしてくれました。どんな美味しいものも残しておこうともせずに私たち食べるように勧め、食べなければかえって気を悪くしてしまいます。時には本当に食べられないときもありましたが、一口でも食べさえすればとても喜んで、私たちが彼らを対等に見ていると思うのです。

夜は戸締りをせず、道に物を落としても拾って自分のものにする人はいません。伏羲河村では全くこんな具合で、それぞれの家々は外出するのに鍵をかけません。村の老人は言います。「大丈夫、心配ないよ。3つにならない赤ちゃんがおもちゃにするんで持って出ることはあっても、大人は絶対そんなことはしないね」と。

剪紙作家-全国コンクールで大賞を獲得

ここに紹介したい人物は郭汝林です。彼は延川県で剪紙によって生計を立てているただ一人の人間です。

今年40歳を越える彼はこの村でよく知られていますが、不幸な子ども時代を送りました。彼が生まれたとき、彼の母親はその出産で亡くなりました。生れ落ちたその日、母親の遺体の傍らでこの世の第一夜を過ごし、お乳を欲しがってあおあおと泣く泣き声で母親を見送ったのです。

他の家に貰われ、養父母に大事に育てられました。が、少年時代に養父母は相ついで亡くなり、再び父親の元に戻りましたが30歳のときに父親もまた亡くなりました。このとき彼は既に一家を成しており、3人の子どもを育てていました。痩せた黄色い大地で一家5人の糊口を養うのは難しい事でしたが、幸い彼には剪紙の技術がありました。彼の手になる剪紙《百馬図》では100種類以上の馬の姿を剪り出し、この100種あまりの馬は姿ばかりでなく表情さえも似ています。彼の剪る十二支はそれぞれ生き生きとして真に迫っています。彼は作品を全国各地を回る巡回展に出品し、全国民間芸術コンクールで賞を取りました。今は一家を挙げて延川県に移り住み、剪紙で生計を立て、剪紙で一家5人の糊口を養い、剪紙で娘を大学に通わせています。

今回私たちが陝北にいる間、仕事を休んで全行程を共にし、道すがら私たちに村の風土や人情について多くを語り紹介してくれました。彼は知らないことは何もないといった風で、私たちは彼に“郭神神”という雅号を進呈しました。

崩れかけた窑洞の中-歴史を100年戻す

伏羲河村には中国で名を馳せる“滩枣”があるにも拘らず村民の生活は豊かではありません。棗はここ3年続けて凶作で、他にはどんな収入もなく、農民の生活は厳しい状況になっています。

私たちがこの村で過ごす間、村民たちは私たちをまるで貴賓のように待遇してくれましたが、毎日の最も美味しいおかずは青いトマトを千切りにして、塩で押し、それから箸をごま油の瓶に入れて垂らし掻き混ぜる、すると最も美味しいおかずの出来上がりという具合です。穀物を育てることができませんから豚を飼えず、一年を通して一度でも肉料理を食べるのは難しいことです。加えて飲み水も生活用水も不足していますから野菜を育てることもできません。野菜を食べたいと思ってもこれも容易なことではありません。

農民たちには医療保険はなく、最低生活の保証金もありませんし、“五保戸”(生活保護を受ける条件)さえもなく、一切合切自分自身に頼るしかありません。特に医療に関する遅れは大きく、女性が出産するのは全て自分の家のオンドルの上で、赤ん坊を取り上げるのは母親か自分の亭主、医術に詳しい人はいないので産婦の死亡率もかなり高いのです。

伏羲河村を歩いて見ますと、まるで歴史を100年戻したようです。いたるところに崩れた塀やひびの入った壁、打ち捨てられた窑洞があり、村の約50%に当たる土の窑洞は使用されないままです。いくつかは長年手を入れていないのでもう住むのは難しいといいますが、実は子どもたちの学校が遠く(4年生になると20里離れた郷政府が管理する小学校で学ぶようになり、中学生は県市の学校で学びます)、子どものために家族たちは家のある村を離れざるを得ず仕事をさがして生計を立てることになるのです。

伏羲河村が、このような悠久の歴史ある村が、いまだかくも貧しいままなのは地理的条件ばかりでなく、他にも重要な原因があると村民たちは悟っています。つまり、学校に行かなかった村人が多いということです。伏羲河村ができるだけ早く豊かになろうとするなら、路はただ一つ、子どもたちをしっかりと勉強させ、子どもたちに科学的な知識を身につけさせてこそ豊さへの夢を実現させることができるのだと思っています。